

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	擬作詩としての清の彭孫貽「和摩詰鞆川荘詩」：「竹里館」、「鹿柴」を例として
Author(s)	鈴木, 敏雄
Citation	中國中世文學研究, 70 : 54 - 67
Issue Date	2017-09-25
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044516">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044516</a>
Right	
Relation	



## 擬作詩としての清の彭孫貽「和摩詰輞川莊詩」

―「竹里館」、「鹿柴」を例として―

鈴木敏雄

一  
明末清初の彭孫貽（字は仲謀、一六一五―一六七三）に、唐の王維（摩詰）の「輞川集」に和する「和摩詰輞川莊詩」十二首がある<sup>1)</sup>。  
清の王士禎「彭孫貽傳」は、その詩作に関し、次のように評している。

上自漢魏六朝三唐宋元、以迄明之何李七子、無體不備、亦無不逼似。

（上は漢魏六朝三唐宋元より、以て明の何李七子に迄び、体の備はらざる無く、亦た逼似せざる無し。）

この評に拠れば、彭孫貽の詩は歴代の詩人達のあらゆる詩体に精通していて、しかもそれらに似せることに長けていたことが分かる。「和摩詰輞川莊詩」も、その得意とする「逼似」によって作られたものであろうと察せられるが、それは蘇軾の「和陶」詩と同じ「追和」詩である。

つて、直接その「逼似」を目的とした六朝以来の所謂「擬古」詩ではない。しかし、蘇東坡以降の和詩あるいは和韻詩は、その制作手法に鑑み、概ね詩の境地や背景、テーマや表現等を原詩と同じくしようとする傾向が強く、広く擬作詩の一種と看做すこともできる。  
ここでは彭孫貽の「和摩詰輞川莊詩」を敢えて擬作詩と看做し、原詩に対するその「逼似」の様を見、それがどのようなことを意味しているのか、見てみたい。  
彭孫貽はその「和摩詰輞川莊詩」を制作するに当たり、序を添えて、次のように言っている。

自古園林勝遊無限、流誦藝林者、惟會稽之蘭亭、季倫之金谷、摩詰之輞川、晉卿之西園、阿瑛之玉山、豈非以高人勝士文藻風流掩映一時乎。蘭亭以書、金谷玉山以詩、西園以畫、輞川則兼而有之。其尤超絕千古者、摩詰五言篇、惟四句不特一時寡和、抑令萬古難追。當時足以唱和摩詰者、惟裴迪一人。迪詩自佳、視王不啻

河漢。

嗚呼、近代名園、耳目所及亦多矣。弇州小祇園、錫山愚公園、雲間顧園、長白小寒山飛來峯葛園、莫不鑿山疏泉、飛橋懸閣、千林極雲、萬壑積翠、窮人工之奇、有天然之勝、冠蓋雲屯、絲宋互奏、厨傳累丘陵、梨園廢紈綺、未幾而花石移主、或則掬爲荒坵。如輞川之千古如在者、無有也。然則園不必勝傳以人、人不必盡勝而傳以詩。

吾讀摩詰之詩、曰「夜靜山空」、曰「空山不見」、曰「深林不知」、曰「磻戸無人」。閑心靜氣、幽興逸致、悟水山之妙理、發雲物之清機、與今之轟飲豪吟、塹土堙谷、固已殊矣。今之輞川、昔之輞川也。即吾得而莊之、園之、欲如摩詰之人、之詩、又無有也。韓持國曰「洛陽名園相接、誰復障吾遊者」。苟已摩詰其人、其詩、即無輞川、可也。因追和之。

（古より園林の勝遊は限り無きも、誦を藝林に流す者は、惟だ會稽の蘭亭、季倫の金谷、摩詰の輞川、晉卿の西園、阿瑛の玉山のみ、豈に高人勝士の文藻風流を以て一時を掩映するに非ずや。蘭亭は書を以てし、金谷玉山は詩を以てし、西園は画を以てし、輞川は則ち兼ねて之れ有り。其の尤も千古に超絶する者は、摩詰の五言の篇にして、惟だ四句のみにして特り一時に和する寡きのみならず、抑そも万古をして追ひ難からしむ。當時以て摩詰に唱和するに足る者は、惟だ裴迪一人なるのみ。迪の詩は自ら佳く、

王を視ること畜だに河漢ならざるのみ。

あゝ、近代の名園は、耳目の及ぶ所亦た多きかな。弇州の小祇園、錫山の愚公園、雲閑の顧園、長白の小寒山飛來峰の葛園、山を鑿ちて泉を疏し、橋を飛ばして閣に懸け、千林は雲を極め、万壑は翠を積み、人工の奇を窮め、天然の勝有り、冠蓋雲のごと屯まり、絲肉互ひに奏で、厨傳は丘陵に累なり、梨園は紈綺のみを廢せざる莫きも、未だ幾くならずして花石は主を移し、或は則ち掬はれて荒坵と爲る。輞川の千古在るがごとき者のごときは、有る無し。然れば則ち園は必ずしも勝へて伝ふるに人を以てせず、人は必ずしも尽くは勝へて伝ふるに詩を以てせざるなり。

吾摩詰の詩を読むに、曰く「夜靜かにして山空し」、曰く「空山見ず」、曰く「深林知らず」、曰く「磻戸人無し」と。閑心靜氣、幽興逸致、水山の妙理を悟り、雲物の清機を發し、今の轟飲豪吟し、土を塹りて谷を堙ぐとは、固より已に殊なれり。今の輞川は、昔の輞川なり。即ち吾得て之を莊とし、之を園とし、摩詰の人、の詩のごときを欲するも、又た有る無きなり。韓持国曰く「洛陽は名園相接すれば、誰か復た吾が遊びに障る者ぞ」と。苟も已に摩詰の其の人、其の詩ならば、即ち輞川無きも、可なり。因つて之に追和す。）

この序に拠れば、彭孫貽は先ず、王維に和した裴迪の詩を「迪詩自佳、視王不啻河漢」と評し、裴迪自身は王維の詩才を「河漢」<sup>②</sup>すなわち黄河漢水のように広大かつ深遠であると見てはいるものの、裴迪の和詩も王維の「閑心靜氣、幽興逸致、悟水山之妙理、發雲物之清機」という詩境に追和できていて、それ自体優れているとする。しかも裴迪を、それができる数少ない一人であるとも言う。

次いで彭孫貽は、一般に文人の莊園というものは時代とともに様変わりするものであるが、王維の輞川莊だけは「今之輞川、昔之輞川也」であると言い、それは王維という人とその詩によって昔のまま変わらず伝わって来ているからであるとする。

そして最後に、そのような「輞川莊」を自らも入手し、王維、裴迪の至った境地に共に遊びたいと言い、彭孫貽は王維の物した輞川莊の境地を模倣対象とし、王維およびそれをよく捉え得ている裴迪を模倣媒体として、欲望の三角形<sup>③</sup>を構成してゆくことになる。

この序文からは、彭孫貽「和摩詰輞川莊詩」が、そのような、いわば王維、裴迪の至った輞川莊での境地に自ら「逼似」したい思いがあつて詠まれていることも明らかとなる。

尚お、この序に挙げる裴迪以外に、代々そのような「和摩詰輞川莊詩」を試みた者は言う通り確かに他には居ないのかと言え、彭孫貽以前の数少ない追和者の一人に、

この序に拠れば、楊敬憲は、復本ながらも精緻である「郭主簿模摩詰本輞川圖卷」を見たことにより、輞川莊の景勝が詩となった時点が想起でき、王維や裴迪とともに遊んでいる心境にさせられると言い、自らが図画からイメージしてきたその境地を更に言葉にすべく「輞川集」に追和していることが知られる。詩だけではなく、「圖」をも見るにより、一層イメージが具体化し、王・裴と語ろうとし、その境地を共にしようとしていることが分かる。

それに対して彭孫貽の「和摩詰輞川莊詩」は、輞川莊の実景はもちろん、図画による触発等は得ていない（欲望していない）。ひたすら王維と裴迪の人と詩とを読んだことよってのみ和詩ができ、しかも昔のままの輞川莊に遊ぶ境地にまで達し得ている。

## 二

楊敬憲の和詩に関して、模倣が「詩」を媒体としているか「圖」を媒体としているかで差異がどの程度生ずるのかについては別途精査が必要であるが、周知の蘇軾による王維の詩画に関する評「味摩詰之詩、詩中有畫、觀摩詰之畫、畫中有詩」（摩詰の詩を味わへば、詩中に画有り、摩詰の画を観れば、画中に詩有り）に依れば、とりわけ王維に限っては、その「詩」の捉える所とその「圖」（畫）の捉える所とは、問題にする程の差異は無く<sup>④</sup>、

元の楊敬憲（字は仲禮、台州（天台）臨海の人）が居る<sup>⑤</sup>。楊敬憲の和し方は彭孫貽とは些か異なり、正確に言えば「輞川莊詩」ではなく、王維の「輞川莊圖」に臨摸した宋の郭忠恕による復本「郭主簿模摩詰本輞川圖卷」<sup>⑥</sup>を見たことにより、王維の「輞川集」二十首に追和することを思い立ち、その「和摩詰輞川莊詩」二十首を題するに至っている。

すなわち欲望の三角形理論に従えば、彭孫貽「和摩詰輞川莊詩」が王維の原詩および裴迪の和詩を模倣媒体とし、それを介在させて対象の輞川莊二十景の境地を捉えたのに対し、楊敬憲「和摩詰輞川莊詩」は主として郭忠恕の図を模倣媒体とし、更に言うまでもなく王維の原図に描かれている「畫」をも模倣媒体としながら、模倣対象である輞川莊での境地を捉えたことになる。

その楊敬憲「題郭主簿模摩詰本輞川圖卷」にも短い序が添えられ、次のように言う。

摩詰嘗與裴迪唱和甘絶、紀輞川之勝。至今讀之、如身遊其間。此本甚精緻、尚可想見其景與詩會之時也。因追和之。

（摩詰嘗て裴迪と唱和すること二十絶、輞川の勝を紀す。今に至つて之を読めば、身づから其の間に遊ぶがごとし。此の本は甚だ精緻にして、尚ほ其の景と詩と会するの時を想ひ見るべきなり。因つて追ひて之に和す。）

むしろ同じ境地を有するものと見るべきであろうとも看做せるので、楊敬憲が「圖」（畫）を模倣媒体としていることは、ここでは問わないこととした。

王維の詩画に関するこの評の「詩中有畫、畫中有詩」については、清の鄒一桂は「善詩者、詩中有畫。善畫者、畫中有詩。然則繪事之寄興、與詩人相表裏焉」（詩を善くする者は、詩中に画有り。画を善くする者は、画中に詩有り。然れば則ち絵事の興を寄するは、詩人と相表裏す。『小山畫譜』詩畫相表裏、すなわち、詩と画ともに堪能な者にとつては、詩と画は表裏一体の関係にあると言う。また、金の李俊民は「士大夫詠情性、寫物状、不託之詩、則託之畫、故詩中有畫、畫中有詩。得之心、應之口、可以奪造化、寓高興也。……」（士大夫の情性を詠み、物状を写すは、之を詩に託せざれば、則ち之を画に託す、故に詩中に画有り、画中に詩有り。之を心に得、之に口に應じ、以て造化を奪ひ、高興を寓するべきなり。……『莊靖集』、すなわち、詩ではなく画という表現手法に依つたととしても、心を口に出そうとする点では、画も詩と同じであると言う。

ただし、南宋の馬廷鸞（字は翔仲、碧梧と号す。一二四七年、淳祐七年の進士）は「一画に因つて詩を詳しくす」という説を唱えている。

余友蘭舉董君、雅人也。示余輞川圖、且索言焉。「宗少文、老疾、所至名山、恐難遍閱、惟當澄懷觀道、臥

以遊之。」余甚欲借君此圖、臥遊其間、而君督之不置也、則爲之言曰。

史稱「維在別墅、與裴迪遊其中、賦詩相酬爲樂。」今觀其空曲浮彩之吟、寒流秋雨之篇、皆不過四句而止耳、何其簡短而有遺音也。後人括摘摩詰、遐想其遊輞川、某句則謂之傲睨閑適、某句則謂之蟬蛻浮游、某句則謂之詩中有畫、畫中有詩。又何其摸寫之無已也、登臨而得于所見者、其語樸、想像而得於所聞者、其詞誇。古今文人、類如此耳。雖然、此因畫而詳詩也。若置詩而詳畫、則又不然。

輞川圖、摩詰所自畫也。世間自有兩紙本、有矮紙本、有高紙本。蘭皋所藏者、矮紙之所摸敷。有能辨之、與爾具一隻眼。

(余が友蘭皋董君は、雅人なり。余に輞川図を示し、且つ言を索む。「宗少文、老いて疾めば、至る所の名山は、恐らくは遍閱し難し、惟だ当に懐ひを澄まし道を觀、臥して以て之に遊ぶべきのみ」なり。余も甚だ君の此の図に借り、臥して其の間に遊ばんと欲するも、而も君は之を督して置かざれば、則ち之れが言を爲して曰はん。

史は稱す「維は別墅に在り、裴迪と其の中遊び、詩を賦して相酬ふを樂しみと爲す」と。今其の空曲浮彩の吟、寒流秋雨の篇を觀るに、皆四句に過ぎずして止まるのみなるに、何ぞ其れ簡短にして遺音有るや。後人摩詰を括摘し、其の輞川に遊ぶを遐想し

とすると、模倣は、「詩」を媒体としているだけのものよりも、「詩」を媒体とした「圖」をも更なる媒体としているものの方が、より具体的である(詳細である)、という(精査を要するが)言えるのかも知れない。

例えば宋の蘇籀の「書輞川圖後」は<sup>1)</sup>、その輞川莊図を具体性の強い言葉に移し換えて語っているようにも見える(後の書き下し文中の( )内は論者による)。

……唐王右丞輞莊矮紙圖、披閱屬爾、洒然慕之。按摩詰、開元詞宗張曲江之客、孝友、禪悅、書畫絕世、仕而屢歸其區處門閭、標蕝山藪、新規奇概、淵兮卓哉、曠達騷人之思也。其疏舉二十許處、城坳岡坂、葺宇上游、編菅裁杏、木欄聯柵、茱萸泝澁、槐栢宮蔭、篠簜嶺峯、北南湖垞、霏裊煙霞、麴塵遠迹、人之虞沿涉、信舫艫之適、亭臨清泚、柳翻碧波、鑾灑白石、萬拳金屑、少飲千歲。檀欒爲里、吟歌琴簫、辛夷爲車、桂旂自舉。有用故割之林、蕃衍遠條之囿、山居之殊勝、詩眼之識拔、如此。……紹興辛未孟秋、眉山蘇籀題

(……唐の王右丞の輞莊矮紙図は、披閱するは爾に属すれば、洒然として之を慕ふ。按ずるに摩詰は、開元の詞宗張曲江の客にして、孝友、禪悦あり、書画は絶世、仕へて屢しば其の区処の門閭に帰り、山藪を標蕝し、新規奇概、淵きかな卓るるかな、曠達にして騷人の思ひなり。其れ疏して二十許りの処を挙げ、城坳岡坂(孟城坳、華子岡)、宇を葺きて上り

て、某句は則ち之を傲睨閑適と謂ひ、某句は則ち之を蟬蛻浮游と謂ひ、某句は則ち之を詩中に画有り、画中に詩有りと謂ふ。又た何ぞ其れ摸写の已む無きや、登臨して見る所に得る者は、其の語は樸なるに、想像して聞く所に得る者は、其の詞は誇る。古今の文人、類すること此の如きのみ。然りと雖も、此れ画に因つて詩を詳らかにするなり。若し詩を置きて画を詳らかにせば、則ち又た然らざるならん。

輞川図は、摩詰の自ら画く所なり。世間に自ら兩つの紙本有り、有るいは矮紙本、有るいは高紙本なり。蘭皋の藏する所の者は、矮紙の摸する所か。能く之を弁する有らば、爾が一隻眼を具ふるに与らん。馬廷鸞『碧梧玩芳集』跋董秀夫輞川圖後)

すなわち馬廷鸞は、王維の輞川莊詩は五言四句でしかないのに余韻があるので、その詩を承け、輞川莊図の摸写も絶えることが無いが、詩は、輞川莊の実景に臨んで作ると簡素になる所を、想像によって机上で模倣するとどれも誇張されることになる、それは摸写の影響により、「画に因つて詩を詳しくす」ということをしたからであつて、もしも逆に「詩をすて置いて画を詳しくす」ということをしていたなら、そうはなつてはおろまい、と言ふ。詩を摸した図画を見た上で(図をも介在させて)詩を作ったから、模倣詩がより具体的になつた(詳細になつた)、と言っているものと考えられる。

て遊び、菅を編み杏を栽多(文杏館)、木欄柵を聯ね(木蘭柴)、茱萸の泝澁(茱萸泝)、槐栢の宮蔭(宮槐陌)、篠簜の嶺峯(斤竹嶺)、北南の湖垞(北垞、南垞、欽湖)、霏裊煙霞、麴塵迹を遠ざけ(鹿柴)、人の沿涉を虞ふるは、信に舫艫の適ひ、亭は清泚に臨み(臨湖亭)、柳は碧波に翻り(柳浪)、鑾灑白石(鑾家灑、白石灘)、萬拳の金屑は、飲むこと少なくて千歳なり(金屑泉)。檀欒として里を為し、琴簫を吟歌し(竹里館)、辛夷を車と為せば、桂旂自ら挙がる(辛夷塢)。有用なるが故に割かるるの林(漆園)、遠條を蕃衍するの囿(椒園)、山居の殊勝、詩眼の識拔は、此の如し。……紹興辛未孟秋、眉山の蘇籀題す(宋、蘇籀『雙溪集』書輞川圖後)

蘇籀はすなわち「輞莊圖」を見、例えば「鹿柴」であれば言葉で「霏裊煙霞、麴塵遠迹」と捉えなおし<sup>2)</sup>、「竹里館」であれば「檀欒爲里、吟歌琴簫」と捉えなおして<sup>3)</sup>、輞川莊図を見たことよつて「詳しく」なつた所を言葉にし、より具体的にしているようにも見える。

楊敬惠の追和も「詩」および「圖」(畫)の双方を模倣媒体として詠んでいるので、「詩」のみの場合以上に、より「詳しく」、より具体的に唱和し得ている追和詩であると看做すことも出来なくはないのかも知れない。しかしその「詳しく」は、「詩」だけを媒体とする場合と比べ、あくまでも馬廷鸞の言う「樸、誇」程の差であつて、今は

表現の確かさに差が出るとか、それによって優劣が生ずるといふ程のことではないと見ておくこととしたい。

### 三

さて、彭孫貽「和摩詰輞川莊詩」の中から、今、王維の「竹里館」詩に和す一篇を例に取り、擬作詩としての「逼似」の様とその意味する所を見たい。  
人口に膾炙する原詩と裴迪の和詩は次の通りである。

竹里館 王維

獨坐幽篁裏 獨り坐す幽篁の裏

彈琴復長嘯 琴を弾き復た長嘯す

深林人不知 深林人知らず

明月來相照 明月来たりて相照らす

同詠 裴迪

來過竹里館 来たりて過る竹里館

日與道相親 日び道と相親しむ

出入惟山鳥 出入するは惟だ山鳥のみ

幽深無世人 幽深なれば世人無し

王維の「輞川集」詩は、二十首中のたとえば「斤竹嶺」詩や「漆園」詩に顕著なように、輞川莊内の各景勝に於いて、先賢の商山四皓や莊子ら主として史上の人物と語らいを図ろうとする詠であることを一つの特徴とするが、

「竹里館」も竹林の七賢の阮籍との語らいを期すべく、阮籍「詠懷」其一を踏まえて詠まれている。

詠懷（其一） 阮籍

夜中不能寐 夜中寐ぬる能はず

起坐彈鳴琴 起き坐して鳴琴を弾く

薄帷鑑明月 薄き帷に明月鑑り

清風吹我衿 清風は我が衿を吹く

孤鴻號外野 孤鴻は外野に号び

朔鳥鳴北林 朔鳥は北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊將た何をか見ん

憂思獨傷心 憂ひ思ひて独り心を傷ましむ

王維はこの阮籍「詠懷」詩の前半を踏まえ、また、裴迪は後半を踏まえて王維に和し、竹里館に於いて阮籍と語ろうとしている。そして、かの時代のような不安な風景はもはやここには無く、王維は「深林人不知」と詠み、裴迪も「幽深無世人」と詠んで、両者境地を一致させ、この竹林（深林）はもはや静かであると説いているものと考えられる。

そこで次に、これらに追和する後世の楊敬惠、彭孫貽の詠を見てみると、王、裴と同様、やはり阮籍を承けつつ王維らに和していることが分かる。先ず楊敬惠は次のように和す。

竹里館（和韻） 楊敬惠

此君儼相峙 此の君儼として相峙し

清坐一嘯嘯 清坐して一たび嘯嘯す

天風振空聲 天風空を振はすの声

萬境通寂照 万境寂照に通ず

「此君」すなわち竹の林の中に在って、「風」および「嘯」といふ語に顕著なように<sup>12)</sup>、阮籍「詠懷（其一）」の前半を踏まえて追和しているものと思われる。

和詩は一般に、和する際に原詩に対する解釈が内包される点で擬作詩の一種と看做せるが、楊敬惠のこの詩も、恐らくは図に描かれる「此君」と対坐し、「長嘯」する王維と思しき詩人の姿を捉え、その詩人は阮籍がそうであったように「風」に胸襟を吹かれ、しかし阮籍が超えようとして超えられなかった「憂思」を克服し、仏教にいう「寂照」の境地にまで到達している<sup>13)</sup>、と詠んでいるものと考えられる。それは、王維らが「竹里館」詩に於いて捉えたその静寂の境地、或いは裴迪のいう竹里館のもたらず「道」を、楊敬惠なりに自らの語で解釈し和し得たものではないか。王維らと山中の「竹里館」に於ける禅の境地を共有し、或いはそれを模倣対象として自らのものとし、ともに竹里館に遊んでいるものと思われる。

では、彭孫貽の和詩はどうであろうか（楊とは異なり、和韻ではない）。

竹里館 彭孫貽

深松結茅屋	深松茅屋を結べば
明月來仍去	明月来たりて仍ほ去る
林中有幽人	林中有り幽人の
只聞長嘯處	只だ長嘯を聞くのみの処

「幽人」が深林の中に在ると（「深松」は「深林」の誤りではないか）、王維の原詩結句にもあるように、明月がいつも通りに訪れ照らしてくれると、彭孫貽は言う。それは、阮籍と語ろうとする王維を、山中で阮籍と同様にやはり「明月」のもとで「彈琴」している隠棲者と捉え、竹里館を王維が専ら阮籍の「長嘯」を聞く場所としている、と彭孫貽が解釈したからではないか。

彭孫貽は、楊敬惠が静かな「道」あるいは「寂照」の境地に逼ろうとしたのとはまた異なり、「明月」のもと、「憂思」を訴える「長嘯」を静かに聞く山中人王維を捉えることで、模倣対象である王維の「竹里館」の境地に「逼似」し、王維らとそのような境地を共有し、或いはそれを自らのものとしようとしていると言えるのではないか。

### 四

もう一首、王維「輞川集」のいま一つの代表作「鹿柴」に対する彭孫貽の「逼似」の様とその意味する所も見ておきたい。

先ず、「和摩詰輞川莊詩」に於いて王維らと詩境を共有しているであろう点を、前掲の「竹里館」と同様に、原唱および楊敬惠のそれと比較しながら見たい。

鹿柴 王維

空山不見人 空山人を見ず

但聞人語響 但だ人語の響くを聞くのみ

返景入深林 返景深林に入り

復照青苔上 復た照らす青苔に上るを

同詠 裴迪

日夕見寒山 日の夕べ寒山を見

便爲獨往客 便ち独り往くの客と爲る

不知松林事 知らず松林の事

但有麝麋跡 但だ麝麋の跡有るのみ（松一作深）

鹿柴（和韻）

楊敬惠

嵯蹙石林稠 崖蹙りて石林稠く

谷靜山泉響 谷靜かにして山泉響く

麝麋其間 麝麋其の間に囿はれ

攸伏息下上 伏する攸は下り上るを息む

鹿柴（和韻）

彭孫貽

不測松林深 松林の深きを測らざれば

青苔鹿跡上 青苔鹿の跡上る

状貌嶮嶮兮峨峨

状貌は嶮々として峨々

淒淒兮澼澼

淒々たり澼々たり

王孫兮歸來

王孫よ帰り来たれ

山中兮不可以久留

山中は以て久しくは留まるべからず

この『楚辭』招隱士（『文選』引）は、山中に留まって世に出ようとしない王孫（屈原と思しき隱士）に対し、そこは猛獸や雜獸が棲息し、草木が密生するような場所であり、久しく留まるべきではないと呼びかけ、帰還を促す詠となっている。

しかし山中人王維は、逆にそのような山中であっても、隱士が留まるべきではないとせず、寧ろ今では留まることのできると呼びかけるべく「鹿柴」を詠んでいるものと考えられる。「白鹿麝麋兮、或騰或倚」という山中であつても、今はもはや「鹿柴」すなわち柵が設けられ、鹿も隱士と同様、隣接しつつも人と距離を取り、人と棲み分けている、故に王孫は留まることができると語ることが出来る。「鹿柴」詩は、いわば「反招隱」になっていると言つても好いかも知れない<sup>[15]</sup>。

少なくとも「鹿柴」はそのような場であるからこそ、裴迪は「但有麝麋跡」と詠み、宋の蘇籀も「麝麋遠迹」（麝麋迹を遠ざく）と明言し、楊敬惠も「麝麋囿其間」

幽人入林久

幽人林に入ること久しく

無人見來往

人の來往するを見る無し<sup>[16]</sup>

この詩は「鹿柴」という詩題が明示するように、また現存の「輞川圖」を見ても明らかのように、人と鹿とが隣接しつつ棲み分けができるような、山との間を仕切る柵を詠んでいる。それは裴迪の和詩の「麝麋」からも知られるように、淮南小山の『楚辭』招隱士に、次のようにあるのを踏まえるものと考えられる。

楚辭「招隱士」

桂樹叢生兮山之幽 桂樹叢生す山の幽

偃蹇連蜷兮枝相繚 偃蹇連蜷として枝相繚ふ

山氣龍嵒兮石嵯峨 山氣は龍嵒として石は嵯峨たり

谿谷嶮巖兮水曾波 谿谷は嶮巖として水は波を曾ぬ

猿狖羣嘯兮虎豹嘯 猿狖は群嘯して虎豹は嘯ゆるに

攀援桂枝兮聊淹留 桂枝を攀援して聊か淹留せんとす

王孫遊兮不歸 王孫遊びて帰らず

春草生兮萋萋 春草生じて萋々たり

歲暮兮不自聊 歲暮るも自らは聊らず

蟋蟀鳴兮啾啾 蟋蟀鳴きて啾々たり

青莎雜樹兮蘋草羸靡

青莎は樹に雜はりて蘋草羸靡たり

白鹿麝麋兮或騰或倚

白鹿麝麋或は騰り或は倚る

と和し、彭孫貽も「青苔鹿跡上」と和している。

恐らくは、楊敬惠が鹿が「騰倚」せずに憩う様を詠んでいるのは、図絵に「麝麋」が具体的に描かれているのを目にしたからではないか<sup>[17]</sup>。また彭孫貽が、鹿がもはや姿を見せず、その気配、その足跡だけを詠んでいるのは、俗人の往來を消す裴迪（と王維）の詩を模倣媒体とし、自らもその様な境地に逼り得ることを確信（解釈）したためであろう。

因みに「麝麋」は、唐以前、六朝時代も依然山中に在る。例えば齊の劉繪「詠博山香鑪」詩は、香炉に彫られた彫刻を詠み、その象る山中の様を、次のように捉えている。

詠博山香鑪 劉繪

蔽虧千種樹、出沒萬重山。上鏤秦王子、駕鶴乘紫烟。

下刻蟠龍勢、矯首半銜蓮。……麝麋或騰倚、林薄杳

芊眠。……

（蔽虧す千種の樹、出沒す万重の山。上は鏤る秦の王子の、鶴に駕し紫烟に乗るを。下は刻む蟠龍の勢ひあり、首を矯げて半ば蓮を銜むを。……麝麋は或は騰り倚り、林薄は杳として芊眠たり。……）

このとき鹿は、草木の阡緜として生い茂る林の中に居る。

また、同じく斉の謝朓の聯句「往敬亭路中」詩では、ともに詠む郡僚のひとり斉挙郎が敬亭山中に入って行く途上の様を、次のように詠んでいる。

往敬亭路中（聯句） 齊舉郎

弱萋既青翠、輕莎方靄靡。鷺鷥沒而遊、麕麕騰復倚。

（弱萋既に青く翠に、輕莎方に靄靡たり。鷺鷥没しては遊び、麕麕騰りては復た倚る。）

鹿はやはり山裾で「騰倚」している。

それが唐詩になると、「鹿」は勿論山中に在るが、更に「苔」と縁ある語となり、例えば次のような用例が見えるようになる。

「幽溪鹿過苔還靜、深樹雲來鳥不知」

（錢起「山中酬楊補闕見過」詩）

「潭澄猿覩月、竇冷鹿眠苔」

（齊己「送人遊玉泉寺」詩）

「印留麋鹿野禽蹤、巖壁漁磯幾處逢」

（徐夔「苔」詩）<sup>〔19〕</sup>

ここには山中の、人との接点で「苔」を踏み、「跡を遠ざく」鹿が居る。

以上から考えると、王維の「鹿柴」も、それとは詠んでいないか見え、実は夕陽に照らし出された山中の柵

「鹿柴」のもとに生える「青苔」には、跡を遠ざけた「麕麕」の「上」った痕跡だけが静かに残っていることになる。鹿は殆ど姿を現さず、人と出会うことも稀であることが分かる。

王維の「鹿柴」は、蘇籀も言うように、鹿が「跡を遠ざく」ことを意味する柵であり、それが山中に設けられていることにより、人も鹿も互いの隠棲にさして干渉し合うことは無い<sup>〔20〕</sup>。王維の末句の「青苔上」（青苔に上る）も、鹿が人前に姿を現すこと無く、山から下りてくることがあっても、寧ろその足跡だけを残している状態を表す語となっていると言っても好いのではないか。

さらに、和詩を擬作詩として見た場合、唱和者の裴迪、楊敬憲、彭孫貽の三者も揃って鹿の足跡を捉えている。王維の「鹿柴」は、「鹿柴」という題下、人は声の響きだけ、鹿は夕陽に照らし出される足跡だけ、王維が屈原と思しき隱士と語ろうとする山中は、静かな光景に満たされている場所であることを詠んでいることになる。

かつて屈原は招隱の呼びかけに応じて鹿の棲まう深林には留まらなかつたが、王維は鹿と共に山中に静かに留まっている。彭孫貽もそのような王維らと「鹿柴」での境地を共有し、「深林」の中のみ在るその境地に「逼似」し、共に遊ぼうとしている。

## 五

彭孫貽が王維の「輞川集」詩の境地を欲し、模倣に走

つたのは、清朝に入り明の遺民となつてからのことである。う。

同里の徐盛全「孝介先生（彭孫貽）傳」に依れば、孫貽は三十一歳の時（一六四五）に、父の彭太僕（期生）はじめ兄弟が「甲申乙酉の変」<sup>〔21〕</sup>で義士として明に殉ぜんとし、翌々年丙戌（一六四七）にはすでに落命している。孫貽は病弱であつたこともあり、母を奉じて変を遁れ、変後、父ほか義士らの遺骸を取り戻しに行き、その後門を閉ざして著述にいそしみ、名勝を巡ることはあつても貴顕と交わることはせず、もはや生涯仕えていない（科挙は貢生で終わっている）<sup>〔22〕</sup>。多作であり、著書は『茗齋集』等多くを遺すに至っている。

遺民となつてからの孫貽の生活を、徐盛全は、次のように記す。

先生、素衣疏食二十餘年、恒若苦塊不交人事、每從緇流羽士、吟嘯野寺荒苑間。或獨行海上、浩歌激烈、與潮汐相互答、或獨立書空咄咄、或中夜揮杯痛哭、人見而怪之。

（先生、素衣疏食なること二十餘年、恒に苦塊<sup>せんくわい</sup>するがごとく人事に交はらず、毎に緇流羽士<sup>しんりゅううし</sup>に従ひ、野寺荒苑の間に吟嘯す。或は海上に独行し、浩歌激烈、潮汐と相互ひに答へ、或は独立して空に咄々と書き、或は中夜杯を揮ひて痛哭すれば、人見て之を怪む。）

三十代以降は、「苦塊」すなわち「苦に寝て塊を枕とし」、国に殉じた父兄や義士等の喪に服する生活を送っている。そしてその中で彭孫貽は、僧侶や道士に従い、野寺荒苑をも訪れている。輞川荘もそのような思いと生活の中で訪れたく思つた荘苑の一つではなかつたか。「輞川集」に追和することにより、遺民としての憂思を含みつつ、鹿と同じように山中に隠棲した山中人王維のような静寂な境地に、共に吾が心境を遊ばせ、在り得べき生活、心の置き処を模索しようとしたのではなかつたか。

擬作詩は、主として宋代以降、言葉の模倣から、それのみに止まらず生活の模倣にまで入つて行く。先賢の文学の中に理念を見出し、それを自らの生活に取り込もうと模倣する傾向が色濃くなる。

明の遺民彭孫貽の「和摩詰輞川莊詩」十二首も、自らの生活に欲しい在るべき荘苑を求めようとした作品なのではないか。元の楊敬憲のそれに現れた境地との差異を見るに付け、王維の模倣とは言え、その欲した生活が如実に垣間見られるような気がしてならない。

## 注

〔1〕「和摩詰輞川莊詩」は、四部叢刊廣編『茗齋集』卷十六（百八葉）所収による。彭孫貽（萬曆四三〜康熙一一二）、字は仲謀、羿仁と号す、嘉興府海鹽の人。伝は、王士禎「彭孫貽傳」、同里の徐盛全「孝介先生傳」、沈季友「彭貢生孫貽」等がある。

〔2〕「河漢」は、漢の王充『論衡』案書篇に「漢作書者多、司馬子長、楊子雲、河漢也。其餘、涇渭也。」とあるのに拠り、字問の規模が涇水渭水でいどなく、黄河漢水のように広大かつ深遠であることをいう。

〔3〕模倣の構造を意味する所謂「欲望の三角形」は、ルネ・ジラール『欲望の現象学』（叢書ウニベルシタス29）による。

〔4〕楊敬惠は、一三三〇年前後、元の泰定、至順の頃の人。浙江儒学提挙として杭州に赴く際、同僚の王士熙は「楊君居史館久、文精思縝、言議濟濟、志于事功、卓然勇往之資也」と言つて見送っている。翰林院編修承事郎を歴ている。

〔5〕この複本は、渡部英喜『自然詩人王維の世界』（明治書院二〇一〇）にいう「輞川図」（五）郭世元摸、郭忠恕筆による輞川図（万曆四十五年（一六一七）の作）に当たる。郭世元は、『山西通志』卷一百六十一（藝術）に、「（明）郭世元、潞安人、書畫胥絶、沈平度令藍田、延世元臨摩詰輞川圖、……」とある。また、郭忠恕（字は恕先）の伝は、『宋史』卷四百四十二にある。

〔6〕「畫」と「圖」のちがいが就いては、伊藤東涯『操觚字訣』に、「畫」は（人物花鳥山水……など）物のかたちをうつすこと。「図」は物のかたちを図うつしにそのままうつすこと、……山水人物草木にても、その模様をうつす心よりいうときは、図という、……それ故「画図」とつづく、とあり、「図」は物の構造を捉えようとする意識が強く働いているものであるが、ここでは山水画と山水図は差異は無いと見ておきたい。

大隱朝市。伯夷竄首陽、老聃伏柱史。昔在太平時、亦有巢居子。今雖盛明世、能無中林士。放神青雲外、絶迹窮山裏。鷓鴣先晨鳴、哀風迎夜起。凝霜彫朱顔、寒泉傷玉趾。周才信衆人、偏智任諸己。推分得天和、矯性失至理。歸來安所期、與物齊終始。」とあり、君子に対して「巢居の子、中林の士」として「神を青雲の外に放ち、迹を窮山の裏に絶し、……帰り来たりて期する所に安んじ、物と斉しく終始せよ」と促している。

〔18〕渡部氏『自然詩人王維の世界』所載の明刻および清刻の輞川図にも、ともに鹿が描かれている。

〔19〕「苔」は、地衣類にまで広げれば、「莓苔有班、麋鹿其跡」（白楽天「磐石銘」）、「石苔青鹿臥、殿網素蛾穿」（李咸用「雪十二韻」詩）等の用例も見られる。その他、「石苔侵綠蘚」（陳後主「立春日泛舟元圃」詩）、「踐莓苔之滑石」（孫綽「遊天台賦」）等の用例もあり、一考の余地がある。

〔20〕「猛虎遠跡」や「虎豹遠跡」の「遠跡」は、班固「公孫弘伝贊」に「以鴻漸之翼困於燕雀、遠迹羊豕之間」とあり、隠遁の様でもある。

〔21〕一六四五年、清は揚州を陥落させて福王をとらえ、一六四七年には、永明王を桂林に走らせ、「大清律」を布く。

〔22〕嘉興府海塩の人である彭孫貽が科挙功名を屑しとせず、読書治学を目的として同志と瞻社を結んだことは、王文榮『明清江南文人結社考述』（二〇一五、鳳凰出版）第四章第三節

「三、効能指向」に詳しく。

〔7〕馬廷鸞は、南宋、理宗の時の宰相（右丞相兼樞密使）。「天下安危、人主不知。國家利害、羣臣不知。軍前勝負、列國不知」という言葉を遺し、その宰相を罷めることになる。「馬廷鸞三不知」の逸聞が、本伝（『宋史』卷四百十四列傳第一百七十三）に遺っている。

〔8〕蘇籀、字は仲茲、眉州の人。蘇轍の長子である蘇遲の長子、すなわち蘇轍の孫にあたる。

〔9〕「遠迹」は、『水經注』濤水に「晉義熙中、沙門釋僧律、葺宇巖阿、猛虎遠跡」とある。猛虎と人とが出会わない状態をいうものと解しておきたい。

〔10〕「檀欒」は、細くて長い竹の貌。

〔11〕渡部氏『自然詩人王維の世界』所載の清刻輞川図の点景人物三名は、立ち姿で描かれている。

〔12〕「長嘯」といえば、たとえば唐の包融「阮公嘯臺」詩に「傳是古人跡、阮公長嘯處」とあるように、阮籍を想起する。

〔13〕「寂照」について中村元『仏教語大辞典』は、真理の本体を「寂」（止）といい、真の智慧の働きを「照」（観）という、と言う。「止観」に同じ。

〔14〕「攸伏」は、『詩』大雅「靈臺」の「王在靈囿、麋鹿攸伏」を踏まえる（王、文王。攸所也、伏藏也）。

〔15〕依韻詩であるが、二句目の「上」字は原唱と同じく上声二「養」韻であり、動詞。

〔16〕彭孫貽「戲賦居北鹿獨宿」詩にも「空山無人草覆谷、麋鹿跡斷大林北」と見える。

〔17〕晉、王康琚「反招隱」（文選卷二十二）には、「小隱隱陵藪、